

物体色のベツォルト・ブリュッケ効果

金子隆芳 筑波大学

かねがね気になっていて、ときどきは談話的に諸先輩諸兄姉に投げかけてきた問題だが、あらためて本欄を借りて述べたいことがある。畏友水野鉄司氏は旧色彩科学協会時代の色科ニュース、1959, Vol 5, No. 1の巻頭に「色票に現れるベツォルト・ブリュッケ現象」と題する一文を寄せた。マンセル系改訂に関するOSAの最終報告(JOSA, 1943, 33, 385-418)は等色相線の主波長が明度ごとにシフトすることについて、いみじくも「ベツォルト・ブリュッケ現象によるものだ」と指摘し、同現象における不変波長との一致にも言及している。ところで水野氏はOSAの図(同報告所載のFig. 13で周知の図)を仔細に検討し、そのシフトが同現象における定説(たとえばPurdy, 1931)と向きが反対であることを指摘した。OSAは等色相線のシフトについてだけで、その向きについてではなにも言っていない。OSAはこの逆現象に気がつかなかったのであろうか。

これは重要な問題だと思うのだが、水野氏以後、とくに話題になった様子はない(色彩科学ハンドブック-南江堂版-に私が水野氏を引用したことはある)。二三の方に聞いてみると、「あり得ること」から佐藤雅子氏(元千葉大)の「先刻ご承知」まで、同意は得られたが、どうも話はそれまでである。いずれにしてもこれはそのつもりで分析的に図を見て初めて分かることで、そんなに当たり前のこととは思われない。ベツォルト・ブリュッケ現象は普通はスペクトル色について言われるが、この逆現象がもし真ならば、これはマンセル系のような物体色系に特有の重要な事実と言えないか。その理由は何か。オストワルト系のシャドウ系列ではどうか。またルード効果との関係は如何。

水野氏は昔の私のカラー仲間だった。その後、行動計量学に移られ、統計数理研究所教授、大学入試センター教授を経て定年退職されたが、惜しくも先頃他界された。投じた一石に学界の反応はなかった。ここに水野氏を偲んで問題を蒸し返した所以である。

50点それとも100点?

近江 源太郎 女子美術大学

私はお酒も飲むし、たばこも未だに口にする。中毒といわれてもしかたがない。そしてもうひとつ、数を勘定して安心する性癖も、中毒のうちかと思う。数学は決して得手ではないにもかかわらず、何人、何%、係数がいくつなどが妙に気にかかる。本や論文でも、キレイなグラフや数値の表が入っていると、とりあえず説得されてしまう。文章の羅列のみだと、つい猜疑心が首をもたげる。上品な趣味ではないと承知しつつも、数えたり、測りたいという気持には抗しがたい。

高じては、“色のセンス”のよしあしを測れないものか、と思い至ってしまう。人間には多分“センス”と俗に呼ばれる心理的な能力がそなわっているだろう。そして、私にはそれが乏しいけれども、何某といわれる画伯やデザイナーにはあふれているのではないかならば、その個人差を測れるはずである。そこで、“配色センス”の個人差を測ることを目指して、以前『色感テスト』なるものをつくったし、最近も標準化はしなかったが小冊子に編んでみた。たとえば、配色を3つ並べておき、「派手さの順に順序をつけなさい」と求める。原理は単純で、事前のSD法調査データによる平均尺度値が正解となる。つまり多数の人びとの感じ方に一致した回答が多いほど、“センスがある”とみなす。こちらは、簡単なアチーブメント・テストぐらいに考えており、美的な創造性などといった深遠なものを測っているとは思っていないのだが、評判はよくない。センスが測れるはずがない、一次元尺度に位置づけるとは何事か、並の回答を正答にするなんて、等々。

そして、テストを受験している様子を上眼使いに見ていると、不正解とされると気に入らないらしい。心理テストについて多少教わると、偏差値などが念頭を離れず、つい50点を中心にテストを編んでしまう。が、受け手の方は100点満点を前提に考えているようだ。かけがえのない個性、私こそその感性、私のアイデンティティという虎の尾を踏んでしまったのだろう。